



SEFI レポート Vol.4

世界のうなぎ博士・塚本勝巳 講演会『うなぎの今と未来』

開催日時 2018年8月28日(火) 18:20~20:00
開催場所 さいたま市浦和駅前パルコ 10F「浦和コミュニティセンター多目的ホール」
主催 協同組合浦和のうなぎを育てる会
共催 埼玉県サステナビリティ研究会、うなぎ持続可能プロジェクト SEFI

“うなぎのまち”浦和にて、日本大学の塚本勝巳教授による講演会『うなぎの今と未来』を開催。さいたま市副市長を始めとした行政職員、教育関係者、商工会、銀行職員、一般市民など合計約200名が参加し、質疑応答でも活発な意見が交わされた。

塚本教授は、冒頭に「うなぎ業界は、単一の種である“うなぎ”だけを扱う特殊な業界である」と述べ、日本のうなぎの食文化の歴史について解説した。また、火野葦平(ひの・あしへい)という小説家が1957年に発表した『赤道祭』の中で、「ウナギというものは赤道直下までタマゴを生みに行き、二年かかって日本へかえる」という文章を残していることを紹介。実際は一年だったが、ニホンウナギの研究が全く進んでいなかった当時の作家の想像力を称賛した。

そして、うなぎはヨーロッパでも古くから食されていることや、ポリネシアに伝わるうなぎの化身ツーナと恋に落ちるヒーナの物語(ヤシの実起源伝説)などを紹介した。

うなぎの生態が分かり始めたのは、1922年にデンマークのシュミット博士が大西洋のサルガッソ海を中心に仔魚(レプトセファルス)が生息していると発表してからである。1930年になると、日本でもうなぎの産卵場を求めて調査が始まったと述べた。

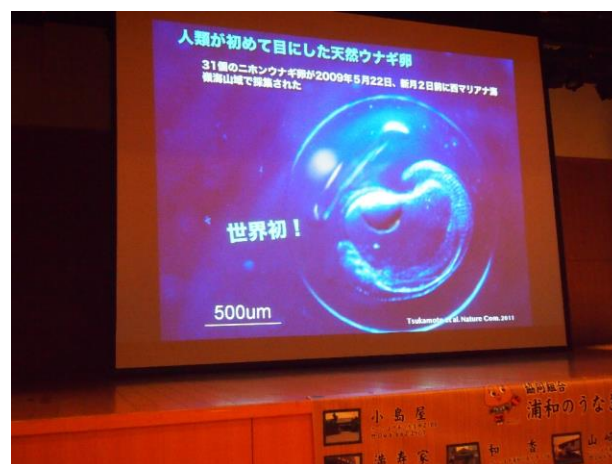
塚本教授は、東京大学海洋研究所に所属してから40年以上にわたってニホンウナギの生態を研究しており、1991年にマリアナ諸島西方海域で約1,000匹の小型レプトセファルスを採用し、2009年に世界で初めて天然うなぎの卵の採取に成功している。調査船で黒潮をさかのぼり、北赤道海流をさかの



▲“世界のうなぎ博士”と呼ばれる塚本勝巳教授



▲1991年にマリアナ諸島西方海域で採れた1,000匹の小型レプトセファルスの論文は『nature』誌の表紙を飾った



▲2009年、人類が初めて目にした天然うなぎの卵

ぼって、より小さいレプトセファルスを求めて研究を続けた成果であった。

最近では、海の深さ 200～230m 付近で卵を産み、ふ化した赤ちゃんは深さ 150m 付近の温かい水の層に集まって浮遊していることが分かっており、今後、さらなる研究を進めたいと話した。

塚本教授らの研究は世界のトップを走っており、生態と養殖の分野では 30 年くらいリードしているとも話し、会場から完全養殖が実用化できる時期を問われると、「私はあと 10 年とみている」と答えた。

現在、世界規模で起きているうなぎの資源減少について研究者は真剣に考えて調査しており、うなぎの食文化については、「絶滅危惧種だから食べてはいけないとは言っていない。何も考えずに食べ過ぎるから獲り過ぎる。うなぎのいろいろなことを思いながら、大切に味わって食べてほしい」と締めくくった。

(小重忠司)